

## イスラーム装飾の宇宙

竹多 格 ITARU TAKEDA  
(INAXライブミュージアム 主任学芸員)



ニーマット・ウッラー廟 (イラン・マハーン)



サーディー廟 (イラン・シラース)



外光が差し込む様子を再現した天窓付きのドーム天井 (「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより)

中近東に見られる美しいドームの外観を持つモスクや廟には、それらの内部に広がるタイル張りの空間に圧倒的な存在感があり、まさにタイル装飾の宇宙がそこに展開されています。「世界のタイル博物館」のリニューアルでは、復元品のひとつとして、イスラームのタイル張りのドーム天井を再現しました。

イスラームの建築が内部装飾に意匠を凝らしたのは、イスラーム地域の気候風土が原因と考えられています。イスラーム以前の紀元前シュメール文化の時代から、砂漠の非常に乾燥した寒暖差の激しい外気に対して、人々は日干しレンガで造った建物でその厳しさをしのぎ、建物内での快適な空間を求めて工夫を重ねました。やがてイスラーム教が興り、礼拝の場であるモスクの空間に、幻想的で包み込まれるような幾何学模様のタイル装飾を施しました。

イスラーム教はアッラーを唯一神としているため、神を擬人化して表すことは禁忌とされました。特に宗教建築ではそれが厳格に守られ、旧教や仏教のように聖像や仏像を礼拝することはなく、それらの代わりに抽象的な図案を追究し、意匠化させました。それが幾何学模様による装飾です。

幾何学模様は、現在ではコンピュータを駆使すれば作図は容易ですが、イスラームでは本来、定規とコンパスだけを使って描きます。その時のベースとなる形は円で、この中心から放射線状に円周を等分割するかたちで幾本もの直線を引きます。円周との交点ができると、それらを結んで新たな直線を引いていきます。こうして何本もの直線で囲まれた、三角形や六角形、八角形など、さまざまな多角形からなる線図が出来ます。この状態ではまだ幾何学模様とはいえず、無限にある塗り分けの組み合わせに応じて、意匠的な意図をもって色を塗り分けていきます。そして、最終的に視認できる形を浮かび上がらせます。

イスラームでは、光は神を表す属性のひとつで、モスクの内部は光り輝くタイル張りに仕上げられ、自然光が採り込まれるなど、その空間に神の存在を象徴的に感じさせる効果が建築装飾に反映されています。復元された八角形のドーム天井には、12種類の形と7色による幾何学模様が、大小約5万枚のタイルによって表現されています。ドームの頂上には、天窓から降り注ぐ光を模した照明が組み込まれ、朝、昼、夕方、夜の光と影を演出しています。

図面制作、タイル制作、施工とも、イスラームの人々は計り知れない手間と苦勞をして取り組み、素晴らしいタイル張りの建物を残しました。復元においては、いずれの工程にも最先端の技術を駆使したものの、図らずも同じ手間と苦勞を要したことは、長いタイル文化との連綿としたつながりを感じます。✿

たけだ・いたる——INAXライブミュージアム 主任学芸員／1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。1979年、伊奈製陶(現・INAX)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

「世界のタイル博物館」はINAXライブミュージアム(愛知県常滑市)内にあります。詳細は、INAXライブミュージアムホームページ(<http://www.inax.co.jp/ilm/>)をご覧ください。



装飾の宇宙を描き出す多様な多角形で構成されたタイル張り (「世界のタイル博物館」常設展示コーナーより)